

寺院と行事

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23890

7. 寺院と行事

田 村 賢

1. はじめに
2. 黒島地区の浄土真宗
3. 寺の年中行事
4. 名願寺の報恩講の様子
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

私が黒島の寺院に興味を持ったのには、自分の実家も寺（福井県、真宗大谷派）であるのだが、他の地区の寺の行事などを見たことが無く、何か形式的もしくは雰囲気における違いはあるのかということに興味を湧いたという所が大きい。また、黒島のような港町として栄えた地域において、仏教という存在がどのようなものであるのかに、好奇心を抱いたというのもある。

調査地である黒島という地域は、そこに住む世帯の実に90%が仏教を信仰しており、80%が「お東」と呼ばれる真宗大谷派であり、そのほとんどが、黒島において「三ヶ寺」と呼ばれている永法寺、福善寺、名願寺のいずれかの門徒に属している。このように、黒島は非常に信仰の厚い地域であり、今も尚多くの仏教行事が行われている。

以下では、黒島地区における浄土真宗についての概要、寺院を中心とした仏教行事について説明した後、実際に参加させていただいた、報恩講の行事について記述し、そして考察へと進めていく。

2. 黒島地区の浄土真宗

ここでは、黒島地区における浄土真宗についての概要、および「三ヶ寺」と呼ばれる各寺院の

歴史についてまとめていく。前述の通り、黒島地区においては「お東」と呼ばれる真宗大谷派が、全世帯の80%と高い割合を占める。黒島における各寺院別の門徒構成は、福善寺が65軒、名願寺が約40軒、永法寺が約40軒となっている。また一部、阿岸の本誓寺の門徒である世帯もある。

福善寺は、かつては道下の方に所在し、真言宗の寺であった。永正元年（1504年）、越中山田庄梅原教願寺と合併することで、浄土真宗の寺となった。その後文禄年間、教願寺を改めて福善寺となったものである。かつて道下にあった影響からか、道下の方にも門徒は多く、約50軒ある。

名願寺は、かつては真言宗寶幢寺と称し、永正元年（1504年）に本願寺第九世實如に帰依し、浄土真宗となった。後、慶長15年（1610年）大谷派に属した。現在の門徒の数は、黒島の方に40世帯強、道下に6世帯、全体で50世帯強である。

永法寺は、かつて蓮如が二俣村に留まっていた時、了順という改宗を広める者が、黒島村を訪れ、天文2年（1533年）に建立されたのが始まりである。このように、いずれの寺も蓮如の時代に、建立されたか、もしくは蓮如の影響で、浄土真宗に転宗した寺院なのである。

この「三ヶ寺」と呼ばれる3つの寺は、黒島という1つの地区に存在し、またその3つが離れて建っているわけではなく、非常に近い土地にまとまって所在している。この原因としては、はっきりとしたことはわかっておらず、黒島が北前船で栄えていた時代に、人の多かったこの土地に寺が移ってきたとか、人が非常に多かったので、寺が3つあっても経済的に成り立っていたのだろうという風に考えられている。3つの寺の所在地が、各々非常に近いことの原因としては、黒島の海沿いの平地のあたりは、住居などが非常に多く、建てる場所としては、現在のように山肌を削って、寺を建てるという方法しかなかったのだろうと言われている。

3. 寺の年中行事

以下、福善寺で行われている年中行事を例に、寺院で行われる行事の概要について説明していく。

(1) 初詣経（はつふぎん）

年が明けた深夜に、門徒の人たちが寺にお参りして、正信偈をあげる。地区の人々は、まず神社に初詣をした後、三ヶ寺のうち、自分が門徒である寺にお参りに来る。正月の行事は割りあい質素に行われるそうである。

表1 年間行事一覧表

1月	1日	初願経	町内御講（1月または2月に行われる）
	11日	船方御講	
2月	25日	正信偈をお勤めする会（各月1回）	
3-6月		正信偈をお勤めする会（各月1回）	
7月	11日～15日	祠堂経	
	21日	殉職海員追悼法要	
8月	7日	コンゴウ参り	
	13～15日	お盆（盆業を行う）	
9月		正信偈をお勤めする会（各月1回）	
10月	24～28日	報恩講	歓喜光院殿御崇敬（10月または11月に行われる）
11月		正信偈をお勤めする会（各月1回）	
12月		正信偈をお勤めする会（各月1回）	

毎月の行事として、「正信偈をお勤めする会」がある。

（聞き取りより筆者作成）

(2) 船方御講

1月10日と11日に行われる、船方祭の翌日に行われる御講。海員団が中心となって公民館で行われており、三ヶ寺の住職が出向く。以前は朝から行事が行われていたが、現在では午後から行われている。皆で正信偈をあげ、次に一人の住職が、「御書」と呼ばれる、本山から下がった文書を拝読し、そして法話を行う。この行事において、導師と呼ばれるリーダー役と、御書拝読、法話の3役は三ヶ寺の住職が、毎年交代して務める。

(3) 町内御講

1年に1回、黒島の7町それぞれが、1月もしくは2月に行う御講。公民館で行われる。船方御講と、形式はそれほど変わらない。

(4) 福善寺御講

例年は、2月25日に行われている御講。2008年は本堂の復旧の関係で、3月5日に行われた。お勤めをし、住職による法話がある。名願寺、永法寺も同じような時期に、それぞれ「名願寺御講」「永法寺御講」というものがある。これらの御講は、各寺それぞれ日にちをずらして行われる。

(5) 正信偈をお勤めする会

新しい試みとして3年ほど前から行われている。1月に1度、門徒の人が本堂に集まり、1時間

ほど、正信偈をお勤めしたり、座談会を行ったりする。

(6) 祠堂経

7月11日～15日の5日間行われる。昔からの先祖を供養する意味で行われる。永代経とも呼ばれる。午前午後ともに行われ、住職がお経を唱え、講師をお呼びしての法話がある。昼にはお齋もある。現在は7、80人ほどがお参りするが、多い時には、最終日である満座の日に200人の門徒が参った。震災後は本堂の復旧の関係で行えなかったが、今年を行う予定である。

(7) 殉職海員追悼法要

第二次世界大戦に駆り出された海員や、船乗り出身で亡くなった人を供養する。海員団が中心となって行われる。以前は、福善寺の本堂に三ヶ寺の住職が集まって行っていたが、震災後は福善寺前にある追悼碑の前にて行われた。

(8) コンゴウ参り

能登や氷見などの、北陸の一部の地域でのみ行われている行事。「コンゴウ」という言葉は仏教に結びつきの深い「金剛」とも、先祖供養の意味合いにより、「魂供」「魂迎」とも言われている。かつては、実家の亡くなった親を供養するために、実家の方の寺に参るという意味で行われていた(西山 1990: 115-168)。一般の法事が、血縁者とごく身近な地域の人々ともに行われるのに対し、この行事は報恩講を越えた集合による行事であり、旧諸岡村である黒島、道下、鹿磯、深見の人たちなど、普段お参りに来ないような人も含め、全部で30人ほどが参る。昔は、80人ほどがお参りしていたそうである。当日はお勤めがあり、お齋も出される。震災後は、一時休止している。

(9) お盆

住職が道下の方を回り、盆業を行う。道下にある50軒ほどの門徒の家々を回り、読経をする。黒島にはこの風習は無い。

(10) 報恩講

親鸞聖人の命日である、11月28日を中心にして行われるものであり、聖人が現在まで教えを伝えてくださった、「御恩」に「報いる」という意味の込められた法要である。浄土真宗において、最も重要な法要行事とされている。門徒が寺に集まり、僧侶と共に読経をする。行事の構成は祠堂経とさほど変わらない。28日の夜には、「改悔批判」というものが行われる。本来は、門徒が自

分が頂いた信仰を、参詣者の前で告白するというものであったが、今では蓮如聖人作と伝えられる『改悔文（かいげもん）』を拝読、解説するという形で行われている。

このように地域の各寺で行われている報恩講は、一般的に「お取り越し」と呼ばれ、本山である東本願寺で行われる、「御正忌報恩講」に先取りして行われるものである。福善寺では2006年まで10月24日から28日の5日間行っていたが、昨年は能登半島地震による被害を受けた本堂の修復作業の影響で、行事を行うことができなかった。福善寺において50～60年前は、この報恩講を15日間行っていたそうである。震災後の2007年と2008年は、本堂の修復の関係で行われなかった。

(11) 歎喜光院殿御崇敬（かんぎこういんでんごそつきょう）

能登地方、特に旧羽咋・鹿島二郡にまたがって営まれる行事。この起源は、天明8年（1788年）の京都の大火で、東本願寺が全焼した際、その後の混乱を收拾し、再建に全力を尽くして亡くなった乗如聖人をしのぶ意味で、行われるようになったものである（福田他 1999: 627）。200年近く続いているもので、羽咋・鹿島と鳳至の2大組に分かれ、その組内の寺院を順次会場として行われる。各寺が会場となるのは、100余年に一度ほどである。福善寺は、昭和56年（1981年）に会場となった。お勤め、法話、御書拝読が行われる。

4. 名願寺の報恩講の様子

以下、2008年12月3日（水）、4日（木）に名願寺で行われた報恩講のうち、12月3日（水）の御講に実際に参加させていただいた時の様子を記述する。

表2 報恩講 当日のタイムスケジュール

	午前	お昼	午後
12日（水）	9:00～ 日中	中休み	13:00～ 逮夜
13日（木）	9:00～ 日中	中休み	13:00～ 逮夜

（聞き取りより筆者作成）

名願寺の報恩講は、例年は11月中旬に3日間行われるものであるが、2008年は本堂の修復の関係で、この時期に2日間行われた。報恩講は通常、3日間のうち中日である、2日目に午前・午後・晩の3度お勤めがあり、それぞれ「日中」「逮夜」「初夜」と呼ばれ、晩のお勤めであれば、「お初夜勤行」という風に言われる。今回は2日間であったので、お勤めは初日、2日目ともに、日中と

速夜の2回であった。報恩講の行事は、2日とも同じ構成で、午前の部、午後の部に分かれ、午前の部はお勤め、午後の部はお勤めの後、講師の方をお呼びしての法話であった。

実際に参加したのは、12日の午前「日中」の時間から午後の「速夜」までで、私が名願寺に着いたのは、開始には少し遅れてしまい9時30分頃であった。名願寺のある小高い山を下りた所(若宮八幡神社前)にある掲示板には、報恩講の案内(写真1)が貼ってあった。本堂に入るとお勤めが行われており、ご住職1人が本堂の前の方の真ん中に座り、読経をしていた。この時、門徒の人たちは10人ほどいらっしやったが、その人たちの中にも、お経を一緒に声に出して読んでいる人もいた。門徒の人たちは、比較的年配の方ばかりであったように思う。「外陣」と呼ばれる、本

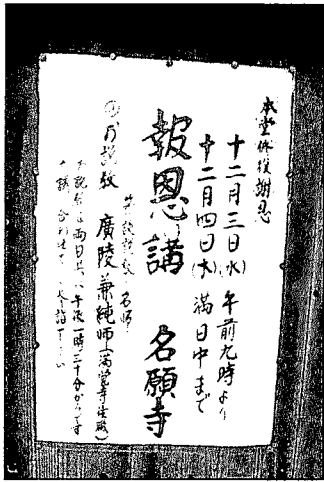


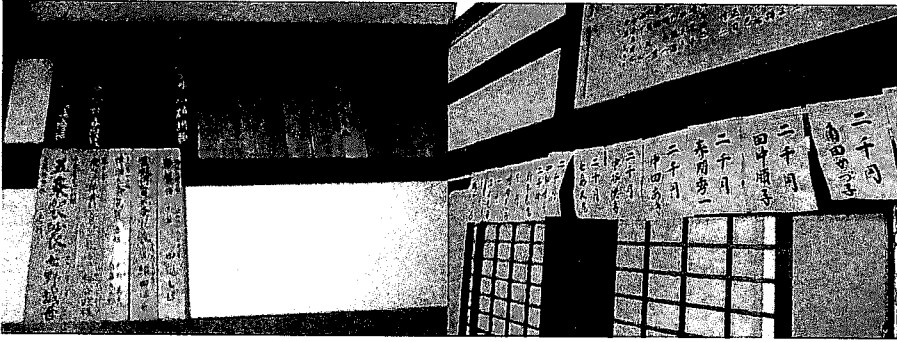
写真1：報恩講の案内

堂の畳が広がっている部分には、座布団がたくさん並べられており、後ろの方には椅子も5個ほど置いてあった。門徒の人たちは、本堂の右半分くらいに固まって座り、世間話などをしていようだった。男性は、スーツなどの割ときちっとした服装で、女性は私服が多かった。

本堂の上の方の壁面には、袈裟や蠟燭台など、寺へ寄付されたものと、寄付された年、またそれを寄付した人の名前が書かれた板が貼られていた。壁面のそれより低い所には、燭代の金額と名前が書かれた紙が、ずらっと貼られていた。さらに、本堂後部の上の方の壁面には、能登半島地震による被害の、修復寄付者の名前が書かれたものが掲げられていた(写真2・3・4)。

本堂の修復は、門徒の人たちの多大な協力によって、行われていることがわかった。この修復によって、名願寺の本堂は土台もさらにしっかりとしたものに入れられ、中も非常に綺麗になっており、畳や壁の板も新しいものであった。また、外にある鐘撞き堂も綺麗に修復されていた。

お堂の前の方の、「内陣」と呼ばれる仏様がある真ん中の部分には、非常に豪華な金色の装飾が施された壇があり、仏様の左右には供え物が供えられていた。壇の前の方には赤いろうそく2本と、立派に生けられた花が立てられていた。「余間」と呼ばれる、左右の奥の方には壇がそれぞれ2つずつ、計4つあり、それぞれろうそくが2本ずつ立てられていた。壇の奥の壁には掛け軸が掛けられていた。向かって一番右端の壇には、遺影とお骨が飾られているのが見て取れた。内陣から下りた所の真ん中のあたりには、数珠や経典などを置く台と、大小2つの「リン」と呼ばれる鐘が置いてあった。大きい方は直径40センチメートルくらいで、「ゴーン」という重々しい音が鳴る。小さい方は一回り小さく、直径30センチメートルくらいで、「カーン」という甲高い音が鳴っていた。



(左) 写真2： 寺へ寄付されたものが掲示されている
 (右) 写真3： 蝋燭代の額と名前が書かれた紙が貼られている

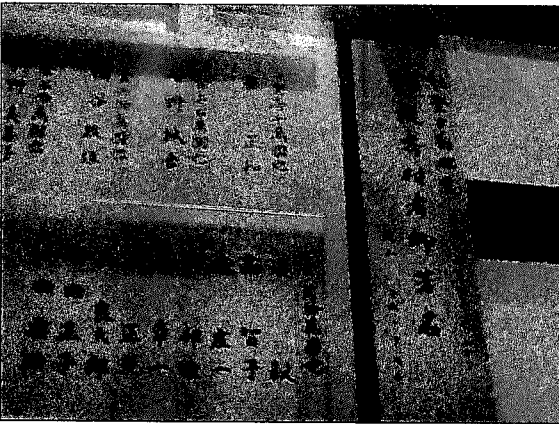


写真4： 能登半島地震修復寄付者の名前が掲示されている

読経は、ご住職のみが前の方のリンのあたりに座り行われた。この時あげられたお経は、正信偈であった。読経は10時頃に終わり、次にご住職が「御伝鈔」を拝読し始めた。この御伝鈔は、第三代覚如上人が、親鸞聖人の遺徳を讃えるために作られたものである。元々は、聖人の生涯の功績を数段にわたってまとめられた詞書と、それに対応した図絵からなる絵巻物として成立したのだが、その詞書の方をまとめたものを、御伝鈔という。図絵の方は、「御絵伝（ごえでん）」と呼ばれている。御伝鈔は上段・下段に分かれており、この日は上段のみが拝読された。この拝読の仕方には普通に文を読むのではなく、独特の調子があった。拝読は15分ほどで終わり、その後、ご住職による御伝鈔の簡単な説明があった。御伝鈔と、余間に飾ってある掛け軸や、親鸞聖人の御伝絵との関連についての話を聞いた。この説明は3分ほどで終わり、これで午前の部は終了した。

午前の部が終わると、内陣の方には幕が張られた。門徒の人たちの中には、いったん家へ戻った人もいたようだった。しかし、門徒会の人である男性5、6人は残って、蠟燭代を半紙に墨で書き、壁に貼る作業を行っていた。また、新たに震災被害の修復寄付をしてくれた人の名前を、追加する作業も行っていた。しばらくすると、ご住職が本堂に出てきて、まだ残っている門徒の人たちと世間話をしていた。

午前と午後のお齋は、3、4年ほど前から出していないそうだ。門徒の人たちが、みんな家でご飯を食べるようになったことと、お齋を準備するための人手不足が、お齋を出さなくなった理由だそう。お齋は無かったが、家族の人たちとお手伝いさんが食べるために、報恩講の料理を作っていたので、ご馳走になった。メニューは、ご飯、味噌汁、漬物、煮しめ、ごぼう、豆、昆布とニシンを煮たもの、大根の煮物である(写真5)。漬物は、胡瓜、かぶ、人参などで、煮しめには、椎茸、里芋、人参、こんにゃくなどが入っていた。煮物などは素朴な味で、あっさりとした味付けであった。この食事は、ご住職と、女性のお手伝いさん2人と、女性の門徒の方1人と一緒に、新築された台所の方で頂いた。ご住職とお手伝いさんたちは、「これおいしいね」だとか、「報恩講の行事は忙しくて大変」などの世間話をしながら、楽しくに食事していっちゃった。



写真5 報恩講の料理

食事を終え、13時ちょうどには鐘が鳴らされた。すると門徒の人たちが、ぞくぞくと寺に集まってきた。

午後の部に集まった門徒の人の数は、60人ほどいた。午前は雨だったこともあって、お参りが少なかったのだろう。13時15分に、門徒会の人々がロウソクに火をつけ始めた。正面にあるロウソクのみは、ご住職が火を灯していた。火を灯すと、ご住職が門徒の人たちに、「今日は六首引きで、疲れたら間に休憩しましょう」と言った。正信偈には、「草譜」と呼ばれるものと、「行譜」と呼ばれるものがあり、報恩講では一般的に行譜の方があげられる。「六首引き」というのは、正信偈をあげ終った後に、「南無阿弥陀佛」と唱えるのだが、その合間に6度、和讃が入るものを指す。

そして13時20分から、午後の部、速夜の読経が始まった。読経が始まると、まだ集まったばかりというのもあり、話をしている門徒の人もいた。しかし、読経が進むにつれてだんだんと静かになり、一緒に正信偈をあげる人も多く見られた。読経は20分ほどで終わり、次にご住職が「御文」を拝読し始めた。この御文とは、蓮如聖人が門徒たちに当てた手紙で、真宗の教えがわかりやすく、かつ簡潔に書かれているものである。これは5分ほどで終わり、その後ちょっとした準備があり、13時45分から、報恩講の案内に「節談説教の名師」と書かれていた、門前町にある満覚寺住職の、廣陵兼純師の法話が始まった。廣陵師の法話は、まず初めに、何か呪文のようなも

のをしばらく唱えてから始められた。話の内容は、日常生活における様々な面白いエピソードを例に挙げ、皮肉も交えながら、諸行無常や帰依などの仏教の教えに関連づけられたものであった。例えば、まだ入院中の人の葬式の予約をしようとしている人の話を例に挙げ、「頼りにするものはわが身だけであり、わが身に帰依しなさい」というメッセージを含んだ話などがされた。法話の途中では、何度も笑いが巻き起こり、若者にもわかりやすく、非常に面白い話だった。また、廣陵氏の話し方はとても独特であった。声は独特のガラガラ声で、能登の方言を用い、途中には吟じるような話法も挟んだりして、非常に勢いのあるものだった。この話し方も、聞き手を引き込む一つの要因ではないかと思う。また、法話中には聞き手との掛け合いがよく行われていた。その様子はまるで漫談のようで、これも廣陵師の法話における魅力なのだろうと思った。廣陵氏の法話は前半と後半に分かれ、それぞれ40分ほどの話があり、間に10分ほどの休憩があった。

そして法話も15時20頃に終わり、全員で恩読讃を唱え、午後の部も終了した。最後に、門徒会の人々の1人が棒のついたザルを持って、賽銭を集めて回った。門徒の人たちは、数百円ほどの賽銭をそのザルの中に入れていた。

最後に、その他にお聞きした話などについて、以上に書ききれなかったことを少しまとめてみる。

名願寺は、黒島が北前船で栄えていた頃に今の土地に移ってきたという話があるということは前述したが、その影響はこの名願寺の造りにも如実に表れている。本堂は非常に立派に造られていて、特に素晴らしいのが、本堂の天井近くにある欄間(写真6)で、これは黒島が栄えていた頃に新潟の方から寄付されたものだそうだ。

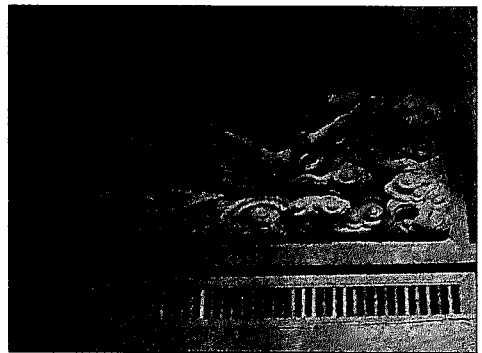


写真6 本堂の欄間

また、報恩講を初めとしたお寺の行事に対するご住職の考えについての話も聞くことができた。報恩講などの行事は、昔に比べるとだんだんと参加する人が減ってきている。お齋を出さなくなったのにも、その影響がある。また能登半島地震の影響も大きいだろうが、祠堂経は3日間、報恩講は2日間の日程になるなど、行事の行程自体も短くなっている。「このような状況の中で、お寺は何か新しいことをやっていかなければならない」と、ご住職は話してくださった。

5. 考察

ここまで、お寺で行われている行事とその実際の例について記述してきた。報恩講の行事は、私の実家でも行われており、小さかった頃から参加していたが、今回実際に他の地域の報恩講に参加させていただいた経験は、非常に新鮮なものであり、新しい発見もあった。

まず感じたことは、行事における雰囲気は異なるということである。私の地域のものに比べて、名願寺の報恩講は、どこかおおらかというか、自由で楽しげな感じをうけた。形式的には仏事という言葉が用いられ、お堅い印象を受けるが、敬虔な心を持って行事に参加しながらも、報恩講という行事は、地域の人たちが集まり、世間話をしたり交流したりする場としても存在する。特に名願寺の報恩講は、法話で有名な方をお呼びしており、それを楽しみに来ている門徒の人も多い。このように、報恩講の行事には人々を楽しませるような娯楽的要素も含まれているのである。仏教と聞くと、何か難しそうな感じがしてとっつきにくいのが、面白い法話を聞きながら、楽しく仏教の教えを学ぶことができる機会としても報恩講の行事は機能している。面白い法話を目当てに来た人も、その法話を通して知らず知らずのうちに仏教の教えを学ぶことができるというわけである。

私は廣陵師の法話を聞いていて非常に面白いと感じたし、若者の私でもところどころ笑ってしまうような時もあった。このように法話は、老若男女問わず楽しむことのできるものであるように思う。しかしそれでも仏教行事というものは、たとえ家が仏教を信仰しているとしても、若者にはなじみが薄く、事実興味のわかないものである。実際、名願寺の報恩講も若者の参加者はほとんどいなかった。また先に述べたように、名願寺における行事への参加者は昔に比べだんだんと減っており、行事の日程自体も短くなっている。このような問題は何も高齢化の激しい地域だけではなく、全国の多くの寺が抱えている問題であると思う。日本人は宗教に対する考え方が独特であり、非常に寛容というか、宗教に対する意識が薄いとよく言われている。現代の若者に関して言えば、その傾向はさらに顕著である。このような状況が続いたら、寺の行事に参加する人というのはどんどん減って、寺自体の存続も危ぶまれることになる。そのような状況の中で、寺は何か新しいことを行わなければいけないと思う。

その新しい試みの例として名願寺で実際に行われているのは、インド音楽のコンサートや展覧会などである。また、夏の本調査の時に見せていただいたが、名願寺は修復の際に立派なシアタールームが増築され、それを利用しての上映会なども行うことができる。お寺でコンサートなどを行うというのは一見珍しい試みだが、音楽というなじみやすい文化を通して仏教に対する堅いイメージを取り払い、人々が気軽にお寺を訪れることができる良い機会となるのではないだろうか。また、私の実家の寺でも「日曜学校」と言って、小学生を対象にして、お経を読む練習をし

たり歌を歌ったりする教室を開いている。全国的な行事で言えば、お釈迦様の生誕日である4月8日頃に「花祭り」と称した行事がある。これも子供たちを対象とした行事で、浄土真宗を身近に感じる機会として、子供はもちろんその親である人たちにも重要なものである。これらのような行事を通して、若い人たちが仏教に関心を持つようになれば、報恩講などの行事にも自然に参加してもらえらるだろう。

お寺というものは、いくつもの時代をまたぎながらその地に存在してきた。しかしこれからは、今までと同じようなことをしているだけでは存続していけないかもしれない。そこで、時には昔からやってきたやり方を変えながらも、その時代にあった試みをしていかなければならない。宗教にあまり関心の無いような若い人たちにも、仏教を知ってもらえるような新しい試みを行っていき、仏教を身近に感じてもらうということがやはり重要なことなのである。

6. おわりに

私が黒島地区のあたりを訪れたのは、この調査実習が初めてではありません。以前、友人と能登の方に遊びに行ったときに、何気なく黒島の海沿いの道路を車で通りました。その時は全く意識をしていなかったけれど、この調査実習を通して、この黒島という地域を知ることができました。黒島には昔ながらの綺麗な町並みがあり、温かい人たちが暮らしていて、独自の文化を持っていることがわかり、貴重な体験であったと思います。名願寺の報恩講では、私の実家が福井の田舎にある寺であることもあり、よそ者である私でも実家の報恩講を思い出し、なんだか親近感がわきました。また、門徒の方にお菓子を頂いたり、厚かましくもお昼をご馳走になったりと、本当に名願寺の方たちには感謝しています。今回、報恩講に参加させていただいたことで、黒島の人たちの温かみを肌で感じることができました。

この調査実習では、本当に色々な方から貴重な話をお聞きすることができました。この報告書を作成することができたのは、本当に温かく丁寧に聞き取りに応じてくださった黒島の皆様、そして名願寺のご住職と節子さんのご好意のおかげです。最後に、お忙しい中、調査に協力してくださった黒島の皆様に深く感謝したいと思います。また機会があれば、是非黒島を訪れてみたいです。